東福門院和子

江戸の花女御

近藤富枝

東福門院和子

江戸の花女御

近藤富枝

毎日新聞社

■著者略歴

近藤富枝（こんどうとみえ）

1922年 東京都生まれ。東京女子大卒。作家。文部省教学局国語課からNHK勤務。戦後結婚、退職し20年の専業主婦ののち文学活動に入る。元武蔵野女子大教授。民族衣装文化普及協会副会長。王朝継ぎ紙研究会主宰。著書に「本郷菊富士ホテル」「田端文士村」「鹿鳴館貴婦人考」「夢二暮色」などあり、他に服飾史や、継紙、源氏物語に関する著書も多く、「色に聴く」「近藤富枝と読む源氏物語」の著書もある。

東福門院和子
江戸の花女御

2000年1月15日　印刷
2000年1月30日　発行

著　者　近藤富枝
編集人　山本　敦
発行人　山本　進
発行所　毎日新聞社

〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋／〒530-8251 大阪市北区梅田
〒802-8651 北九州市小倉北区紺屋町／〒450-8651 名古屋市中村区名駅
出版営業部 03(3212)3257・図書編集部 03(3212)3239
本文印刷　精文堂
製本　大口製本

落丁・乱丁本は小社でお取替えします
©Tomie Kondou Printed in Japan 2000
ISBN 4-620-10609-7

目

次

早咲きの椿……7
天守閣の富士……11
さらば江戸城……38
江戸の女御……64
女人曼陀羅……90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

母となる……117
おふく上洛……145
国母の道を行く……173
寛永の弥栄（いやさか）……202
修学院離宮……229

表紙　[右]草花文様四つ替小袖
[左]小直衣　三つ横見菊文様
いずれも京都国立博物館所蔵より

装丁　津村明子

江戸の花女御

―東福門院和子―

早咲きの椿

京都の冬は時雨とともにやってくる。まだ梢には鮮やかな紅葉の色を残していても、やさしい音にそれと知ると、京人（みやこびと）たちはきものを一枚かさねるのである。

ここ東山の一帯は清水寺をはじめ多くの寺があるが、そのなかで高台寺の境内に早咲きの椿があるのを喜んで数寄者たちが訪れてくるようになった。

その寺の主は亡き関白秀吉の室ねねである。今は高台院と名乗っている。

「咲いたかなあも、ンじゃあ一株を八条宮さまへお届け申せ」

と侍女に命じている。年は七十五、六というのに十歳は若い。色白のツヤツヤした肌で頬の赤いのが目立っている。

この寺に入ってすでに十年余りたつ。しかしこのひとは少しも抹香臭くなかった。僧よりは武士、公家たちの訪問が多く、出入りの商人が驚くほど、酒や反物を買いこむ。

夫のたてた豊臣家は滅んだというのに徳川家から化粧料一万三千石をもらい、他に高台寺の寺領は五百石、しかも諸役は免除という好遇を受けているのは何故か。

「おお、おだい（大根）がぎょうさんありますわな、それもいっしょに」

八条宮は上皇後陽成院の弟宮で、一時秀吉夫妻の養子だったことがある。人物もよく、風雅の道にも明るい方で、いまだにねねと心を寄せあっている。

まるまると肥ったからだを大きなしとねにしずめ、

「そうじゃ忘れていたわなも、和泉守殿が待っておったなも。ここへ通しゃれ」

和泉守藤堂高虎は身長六尺二寸、渡来系の秦氏の末裔だけあって大男である。今は徳川家の重臣で家康、秀忠と二代の信頼があつく、外様大名のくせに最高ブレーンとして重用されているが、彼ももとはといえば秀吉の下で働いていた男である。何しろ築城術、鉱山発見などの高級技術を身につけているので引手あまたであるのを利用し、これまで政治の裏面工作に凄腕を発揮してきた。

ねねと家康との密約を斡旋したのは彼なのだ。関が原戦のときにねねは自分の一族の浅野氏をはじめ、いわゆる北政所派とよばれる加藤清正、福島正則などの大名たちに、

「内府（家康）殿にお味方しあせ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と指令し、さらに西軍（石田三成軍）についていた甥の小早川秀秋を寝返らせて東軍勝利へと導く。化粧料の一万三千石も高台寺建立もみなこのときの報償であった。

ねねのこの動きを秀頼の母である淀殿への嫉妬からとうなずく者もいたが、

「それは違う。高台院さまは生まれつき世の中を動かすことがお好きなのじゃ」

と高虎は思っていた。家康もそこが付目（つけめ）だったのだ。そして彼が人目を忍んで高台寺に現れるのは理由があった。

「で、おみゃあさま、ご用の趣をお申しゃあせ」

「はあ」

豊臣家の遺金はすべて徳川が押収したが、それでも驚くほどの金額がねねの懐に残った。それを何と高虎が預かって堺の商人などに廻しふやしているのだ。遺金はふえて一城が建つほどになっている。夫の供養や困っている一族の女どもにせっせと配っても、少しもへらない。それをどうしようかという相談だった。

「当今（とうぎん）さま（後水尾天皇）をわしゃ好いとる。秀頼殿追討の勅宣を断りなさったと聞いてるでの。ぎょうさんたまったならいっそ当今さまにそっと献上申そうか。離宮を建てるなり、兵を養われるなり、お好きになさればよいわも、ホ、、、、」

思いがけない話にさすがの高虎も度肝を抜かれた。
「しからばその時がきたらお指図を」
と早々に退散する。
「あいかわらずお達者な舌よ」
と思いながら。

天守閣の富士

長い袴

突然、

「ウワァー」

という若い女たちの華やかな笑い声が、江戸城の本丸、大奥の長廊下で大きく上がった。

「何ごとぞ」

と長局の部屋々々から女中衆が顔を出す。みんな若い女たちだから、ゾロゾロと集まってきた。

「ハイ、それではもう一度」

手をたたいて指導しているのがややの局。公家の娘で、ここ半年ほど前から江戸城の奥

に仕えて、和子姫やおつきの女中衆に礼法などを教えている。

これは驚いた。姫を先頭に側近の肥後、ふう、くう、くりなどが、小袖の上に長い緋袴をはいてゾロゾロと歩く練習をしていたのだ。それを朋輩たちが見物している。その数およそ二、三十人。これでは騒ぎが起きないほうが不思議である。

和子をはじめ、全員生まれて初めて身につける緋袴であった。何しろ、曲で紐下の長さが五尺、精好というツルツルした生地でゆったりできているから、腰につけ、足を入れたもののひと足歩いただけで、滑ったり、よろめいたりする。静かに見学するはずだった女中衆も、くりがステンと転んだのをしおに、もうがまんできなかった。それで大奥をゆるがす「ウワーッ」の笑い声となった。

元和五年の正月のことであった。ここ江戸城の主は二代将軍徳川秀忠である。まだ四十歳の働き盛り。そして奥の束ねをするのは御台所のお江与である。彼女は戦国大名の浅井長政を父に、織田信長の妹で天下一の美女とうたわれたお市の方を母としていることはごぞんじだろう。淀君と京極家に嫁いだお初は姉である。このころは、後年の大奥のようなめんどうな役職制度などはなくて、男性が奥へ通ることを禁じられるようになったのも、つい一年ほど前からというおおらかな時代であった。

しかしお江与はなかなかきびしい性格で、
「女は和ぎ順いて静かなるをよしとする」
と周囲に日ごろ言い聞かせていた。で、女中衆は口かずが少く、江戸城の奥はいつもひっそりとしているのが決まりだった。
ところで本編の主人公は和子姫である。年は十三歳。肥後やふうに比べて身はちいさいというのに、スイスイと袴を上手にあやつり、いっこうに転ばない。
「姫君の何とご器用な」
と見物人から賞讃の声が上がる。
実は遊びや酔興で彼女たちは長廊下を騒がしているわけではなかった。近い将来に和子の上洛が控えている。しかも帝の女御として入内するのだ。入内するときには十二単を和子は着用することになる。そこで長袴をはいての歩行練習となった。
わけを聞けばさすがのお江与も騒ぎを叱ることができない。
「ごくろうであった」
とねぎらい、老女が金平糖を届けてきた。いくら将軍家でも、金平糖だの加須底羅だのという南蛮菓子はまだ貴重品である。

「さァ、みなもいっしょに」
と和子は惜しげもなくいただきものを一座の者たちに分けさせる。
あたたかでやさしい人柄と和子の評判はとても上々だ。が、少々おてんばのほうで、
「貝合せか胡鬼板（後世の羽子板）でお遊びを」
という提案を肥後がしても首を振り、
「馬場をひと周りならいたしたい」
というおおせだ。彼女は乗馬が大好きである。
正月早々それはと肥後がしぶり、長袴の練習に変わった。
肥後は和子の誕生とともに七歳で侍女になった。星合采女正具泰の娘で幼いながらも賢いのをみこまれたのだ。その後、姫のおそば去らずで、ことによるとお江与や乳母殿よりも親しい間柄かも知れない。
さて入内とは、妃のひとりとなって帝の後宮に入ることで、武家出身の女性の入内は、平清盛の娘の建礼門院徳子が高倉天皇の中宮となったのが初まりで、これに続く者はなかった。もっとも、源頼朝が大姫の入内を企てたことがある。しかし大姫が病死し、このことは成らなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com